

大洗磯前神社における信仰と観光

卯田卓矢・松井圭介

キーワード：信仰，観光，信仰基盤，開発資本，大洗磯前神社

I はじめに

I-1 研究課題

海上を生活の糧とする漁師は陸上よりも多くの自然的制約や生命の危険を伴うことから、神仏への信仰心が篤いとされる。とくに、航行技術が未発達な時代においては、航海は人力を超えた領域と考えられていたこともあり、神仏への祈願は盛んに行われた（北見，1970）。民俗学者の北見によると、漁師の信仰は主に船に宿る神霊（船霊）に対する信仰、海を司る神への信仰、陸上に立地し、航海安全祈願の対象となる神への信仰の3つに分類されるという（北見，1973：679）。その中で、第3の信仰については、海岸付近の山や岬などが「ヤマアテ（ヤマタテ）」の対象となることで信仰されることが多い。ヤマアテとは、漁師が船上から望見可能な山地のスカイラインと沿岸や島嶼の地形・地物の組み合わせから、海上位置を把握する伝統的空間認識手法のことである。ヤマアテは近代的な航行設備や魚群探知機などが未発達な時代において、日常の漁業活動に重要な役割を果たした（五十嵐，1971；桜田，1980：211-212など）。そのことから、漁師は目当て（アテ）となる山や岬などを航海安全祈願の聖地として重視した（野本，1988など）。

こうしたアテを聖地とする場所は各地に存在する。たとえば、房総半島南東部の清澄山（377m）は半島の中で比較的標高が高く、海上からの望見

も優れていることから、周辺の漁師を中心に信仰が篤い。山麓の天津地区では毎年2月と7月の祭礼時には休漁し、各戸代表者による参拝が行われている。この清澄山は近隣の小湊、勝浦、鴨川などの漁師からも信仰されており、祭礼当日は網元が代参している（斎藤，1998：16）。また、神奈川県の大山（1253m）は雨乞いや修験の山として有名であるが、漁業神としての性格も有する。大山は相模湾から約10kmの距離にあり、かつ平野に屹立する孤立峰であることから、海上から絶好の目当てとなり、漁師の信仰を集めている。大山を信仰する漁師は地域ごとや船主単位で登拝講を組織し、中腹にある大山阿夫利神社へ参拝する（鈴木，1992）。

一方、これら聖地の中には近代以降の観光の進展に伴って、聖地および周辺地域が大きく変容した場所もみられた。日本における観光は鉄道網の発達と結びつく形で大正中期ごろから普及し、海水浴、ハイキング、登山、スキーといった多様な対象への観光が盛行した（青木，1973など）。その中で、当時の開発資本である私鉄は、海浜の景勝地に立地する社寺についても観光対象として重視し、当地への鉄道敷設や海浜付近への遊園施設の建設などを進めた。また、戦後になるとモータリゼーションの進展を背景に自動車道が整備され、付近では戦前期と同様に開発が進行された。そのことから、海浜の聖地は近代以降において、漁師による信仰の場とともに、観光地としての性

格も有するようになったと捉えることができる。

漁師の信仰対象としての聖地に関する研究は、これまで民俗学や歴史学を中心に多くの蓄積をもつ。先行研究では具体的な場所として、金毘羅宮（栗田編，1983；近藤，1987；守屋編，1987など）、住吉大社（岩井，1987；真弓，2003）、大山（圭室編，1992；西海，2008など）、金華山（宮田，1969；小野寺，1991）、善宝寺（五十嵐，1976；佐藤，1988）、正福寺（野村，1992）などが取り上げられ、信仰形態の歴史的展開や現在の信仰圏などが明らかにされた。その中で、高木（2007）は青峯山正福寺を対象に、寺院の信仰史と現在の信仰形態を検討した。高木はそこで、江戸時代には廻船問屋の信仰、明治以降になると遠洋漁業者の大漁祈願・航海安全の祈願所とされたことで信仰圏が拡大したこと、一方で近年は漁業の衰退によって信仰圏が縮小しつつも、海上守護の有名性から新たに海洋レジャー業者の祈願が増加したことなどを指摘した。

一方、地理学分野における研究は概して多くない。地理学では青野（1953a, b）を嚆矢として漁村に関する多くのモノグラフが存在する（藪内，1958；柿本，1975など）。しかし、これらは主として漁村の社会的・経済的構造の解明を目的としたものであり、宗教的側面については詳しく論じられていない。その中で、漁師の信仰に注目した研究として斎藤（1998）がある。斎藤は房総半島を事例に、ヤマアテの空間認知手法の構造と、その対象である山への信仰形態を検討した。また、位野木（1959）は金毘羅宮を取り上げ、参道に多数分布する灯籠の記銘から金毘羅宮信仰の推移について明らかにした。松尾（2002，2004）は銚子市川口神社を対象に、同神社の信仰の変遷を漁業形態の変化から考察した。

以上、先行研究は民俗学や歴史学を中心に研究が蓄積されてきた。そこでは、全国的な信仰拠点となっている聖地を対象に、主として聖地と漁師との結びつきの歴史的展開や、漁師の信仰形態が明らかにされた。しかしながら、先行研究では聖地と観光との関係についてはあまり触れられてい

ない。先述のように、海岸沿いの聖地では観光開発によって新たに観光地としての性格も有するようになった。この点に関連して、先の高木（2007）は現代の正福寺信仰を検討する中で、新たな祈願者として観光業者の存在を指摘している。ただ、高木は観光の進展に伴う聖地周辺の変化や、それに対する聖地側の実践については十分に論じていない。海浜の風光明媚な場所に立地する聖地は長期に渡る観光開発によって多数の観光客が訪れた。また、近年は新たにパワースポットとして位置づけられたり、地域振興の起爆剤として注目を集めたりする聖地も存在する（岡本，2015など）。そのことから、近代以降の聖地の展開を捉えるには、漁師の信仰形態の変遷だけではなく、観光との関係についても視野に入れることが重要であるだろう。

本稿は以上の課題を踏まえ、海浜の聖地における信仰と観光との関係について明らかにすることを目的とする。研究対象は茨城県東茨城郡大洗町の大洗磯前^{いそさき}神社である。

1-2 研究方法

宗教学者のエリアーデに代表されるように、これまで聖地は場所自体が有する固有の宗教的意味や力にその特別さを求める実体論的な見方が重視されてきた（エリアーデ，1969；植島，2000；鎌田，2008）。この立場では場所の固有性はあくまで聖なるものの顕現に支えられており、聖地に対する社会的・文化的な働きは二義的なものとされた。宗教学者の山中によれば、こうした聖地理解では、「聖なるもの」に宗教、「俗なるもの」に観光（ツーリズム）が位置づけられ、俗に対する宗教的価値の優位が暗黙のうちに了解されているという（山中，2012：10）。そのため、これまで聖地研究において観光が研究対象とされることはほとんどなかった。

しかしながら、聖地と交通機関および観光産業は歴史的近接性を有しており、とくに近代以降は先述のようにその傾向が顕著である。また、2000年以降においては文化遺産ツーリズムの流行や世

界的な聖地巡礼の興隆などもあり、観光との結びつきは強まりをみせている(McKelvie, 2005など)。以上の状況を受けて、近年の聖地研究では観光との関係を注視することが聖地理解を深めるうえで重要であるとの認識がなされるようになってきた(Swatos and Tomasi, 2002; Timothy and Olsen, 2006; Stausberg, 2010; 山中編, 2012など)。

山中は聖地と観光に関わる先行研究を宗教思想、巡礼、聖地の3点にまとめている(山中, 2012: 10-13)。その中で、本稿と関連する聖地に関しては観光による聖地の変化を促進する多様な主体に着目した研究が存在する。森(2009)は近現代の江の島を取り上げ、江島神社や地元住民、行政、観光業者などの複数の主体の相互作用から、当地の観光地化の過程を跡づけた。また、對馬(2012)は聖地への鉄道敷設や各種の乗客誘致策といった私鉄の「宗教コーディネーター」としての役割と、聖地側の協力関係について考察した。ただ、聖地の中には外部主体との関係を強化し、観光客の受け入れを活発化させる一方で、聖地が立地する地形的な問題や聖地の運営方針などから、観光との関係を積極的に進めない聖地も存在すると考えられる。しかし、先行研究では外部主体との相互依存性を強調する傾向があり、こうした聖地の特性と観光との関係については十分に論じられていない。両者の関係をより多面的に検討するためには、立地性や信仰形態を含めた聖地自体の特性に注目することが重要であると考えられる。

本稿は以上から、大洗磯前神社の立地性や信仰形態の特性を踏まえたうえで、当神社における信仰と観光との関係について考察する。大洗磯前神社は後述する祭神の降臨場所から漁師を中心に広く信仰を集めている。また、医薬や疾病平癒の神としても信仰が篤く、医薬品関連業者による祈願も多くみられる。加えて、大洗磯前神社が鎮座する大洗町は明治末以降、茨城県内の主要な海浜観光地域として大規模な観光開発が長期に渡って進行した。そのことから、大洗磯前神社は海浜における聖地と観光との関係を検討するうえで重要な

事例といえる。

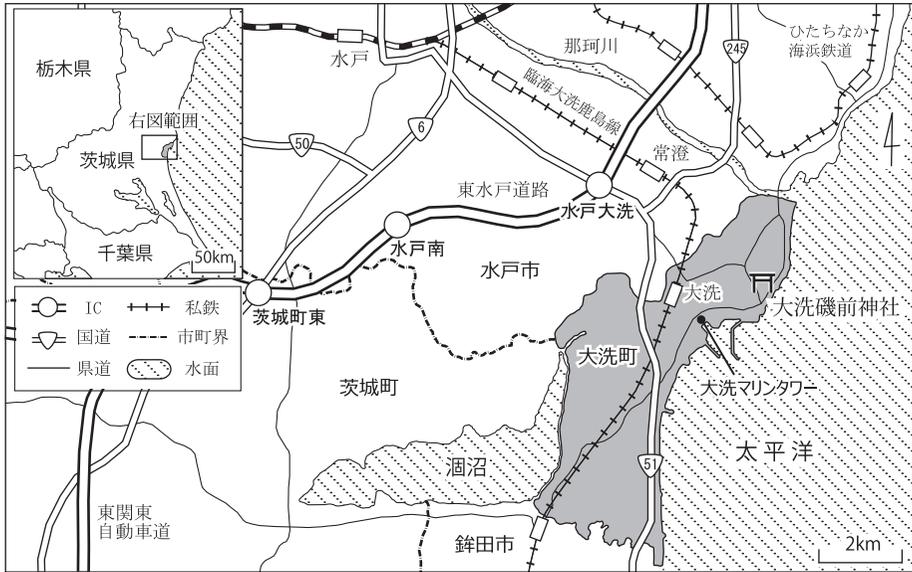
以下、研究手順について述べておく。I-3は対象地域の大洗町を概観する。IIは大洗磯前神社の歴史的展開について述べる。IIIでは、大洗磯前神社の信仰圏の特徴や宗教組織、漁師の信仰形態を検討する。IVでは、大洗町における観光の進展と大洗磯前神社との関係について言及する。Vでは以上を踏まえたうえで、大洗磯前神社の信仰と観光の特性を考察し、VIで結論とする。

I-3 茨城県大洗町の概要

茨城県東茨城郡大洗町は茨城県東部に位置し、北は那珂川を境にひたちなか市、西は水戸市常澄、南は鉾田市と接する。町の東側は太平洋に面する(第1図)。主要幹線は海岸線を沿って東西に走る国道51号線や、内陸部を東西に通る鹿島臨海鉄道大洗鹿島線がある。また、町の北東約1kmには1996年12月に北関東自動車道(東水戸道路)の水戸大洗インターチェンジ(IC)が開通した。

大洗町は1954年11月に旧磯浜町と旧大貫町が合併し、発足した。1955年7月には隣接する鹿島郡旭村の旧夏海地区の一部が編入された。大洗町は江戸時代以降、漁業地域として繁栄した。1886年の記録によれば、旧磯浜町の生業戸数2,114戸のうち、漁業は802戸、農業兼業は215戸と漁業関係者が約半数に上った(伊藤, 1990: 23)。1894年には旧磯浜町の漁獲高が茨城県全体の約3分の1を占めるまでになった。その後も漁船数の増加や漁船の大型化が進められ、旧磯浜町を含む東茨城郡の沿岸部は県内でも有数の漁業地域となった。また、当町では明治末ごろから水産加工業も開始され、カツオ節の製造などが盛んに行われた。漁業はその後も発展したが、戦後になると漁業政策の転換や社会構造の変化などによって急速に衰退した。ただし、水産加工を中心とする製造業は現在も町の主要産業のひとつとなっている(大洗町史編さん委員会編, 1986: 866-870)。

また、旧磯浜町は明治末ごろに海水浴場が開設され、海浜観光地域として発展を遂げた。昭和戦前期ごろには海水浴客相手の土産品店や旅館が旧



第1図 研究対象地域

町内一帯に拡大した。その後、1960年代ごろになると、旅館とともに家族経営を主とする民宿が多くみられるようになった。民宿は1980年代以降衰退したとされるが、2015年現在でも旧磯浜町に14軒、旧大貫町に4軒所在している（大洗町民宿組合HPによる）。また、近年は先述した水戸大洗ICの開通、および2011年3月の北関東自動車道全線（高崎ジャンクションーひたちなかIC）の開通によって栃木県や群馬県からのアクセスが高まり、観光客が増加している。

II 大洗磯前神社の歴史的展開

II-1 大洗磯前神社の創建と歴史

大洗磯前神社は大洗町磯浜町の大洗山（蓋山、笠置山などともいう）に鎮座する。神社の創建は『日本文徳天皇実録』によると、856年12月に「常陸国上言。鹿嶋郡大洗磯前有神新降…」と大洗沖の海上から神が降臨したことに由来する（第1表、写真1）。この時降臨した神は^{おおなむちのみこと}大己貴命と^{すくひこのの}少彦名命の二神とされる。常陸国の国司は直ちに朝廷に奏上し、翌年10月には「大洗磯前薬師菩薩名神（神社）」の称号が授けられた。社名の中の「薬師菩

第1表 大洗磯前神社の歴史

年	事項
856（斉衡3）	大洗沖に祭神が降臨
857（天安1）	「大洗磯前薬師菩薩名神」の社号を授与
1558～70 （永禄年間）	小田氏治の乱により社殿が焼失
1689（元禄2）	海岸沿いから大洗山中腹への遷宮
1715（正徳5）	社殿を山上に移築、社号を「大洗磯前神社」へ変更
1730（享保15）	『大洗磯前神社本縁』の献納
1843（天保14）	徳川斉昭が社殿修繕を指示
1873（明治6）	新治県の県社に指定
1885（明治18）	国幣中社に指定、正式社名を大洗磯前神社とする
1926（大正15）	帝室林野管理局より境内地の編入
1952（昭和27）	宗教法人の登記完了
1955（昭和30）	大洗磯前神社献饌講の創設
1969（昭和44）	敬神婦人会の創設
1970（昭和45）	本殿と拝殿が茨城県重要文化財に指定
1997（平成9）	大洗海洋博物館が開館
2005（平成17）	鮫鱈奉納包丁式
2010（平成22）	大洗初日の出バスと大洗磯前神社初詣シャトルバスを運行
2013（平成25）	大洗女子スタンプラリー道の実施、絵馬掛け所の新設

（岡田（1981）、大洗町史編さん委員会編（1986）、聞き取り調査より作成）



写真1 大洗磯前神社本殿
(2015年8月 卯田撮影)

薩」は本地垂迹説の影響とされ、平安時代初期ごろには仏教で医薬を司る薬師菩薩と神との習合思想が浸透していた。日本における薬師信仰定着の要因として山岳宗教や海洋宗教との習合が指摘されているが（五来，1986），大洗磯前薬師菩薩名神の名は海洋宗教との結びつきの例と位置づけられる。

中世になると，大洗磯前神社は当時の領主や武將の庇護を受けて教線を拡大し，末社40余り，神領1,000石といわれるほど繁栄した。しかし，永禄年間（1558～70年）の小田氏治の乱により社殿が焼失した。この焼失によって神領は10分の1程度に減少し，以後は海岸沿いに仮の社殿を構えて細々と祭礼を維持する状態となった。

江戸時代になると，水戸藩2代藩主徳川光圀が推進した社寺改革の一環として大洗磯前神社の復興が目指され，1689年に海岸沿いから大洗山中腹への遷宮が行われた。次いで，3代藩主徳川綱條は享保年間（1716～35年）に社殿を山上に移し，この時に社号を「大洗磯前神社」へ変更した。また，9代藩主徳川斉昭は大洗磯前神社へ度々参拝し，1843年には拝殿や屋根の修繕を指示したり，朱印高を上げたりするなど崇敬を示した（大洗町史編さん委員会編，1986：342-343）。

明治時代に入ると，社格制度により1873年8月に新治県の県社に指定された。1885年4月には官社のひとつにあたる国幣中社に指定され，その際，

社号を正式に「大洗磯前神社」と定められた。当時の大洗磯前神社の組織は宮司1名，禰宜1名，主典3名，等外出仕4名であった。戦後，大洗磯前神社は社格制度の廃止により1946年6月に宗教法人の登記を行い，1952年9月に手続きを完了した（岡田，1981：78）。なお，2016年現在の大洗磯前神社の組織は宮司1名，禰宜1名，権禰宜4名，出仕1名である（大洗磯前神社社報による）。

大洗磯前神社はその創建が海上からの神の降臨であったことからもうかがえるように，海や漁師との結びつきが強い。太平洋沿岸は厳冬期にかけて海上の濃霧が強く，漁業活動に支障をきたすことが少なくない。しかし，大洗磯前神社周辺の大洗沿岸から鹿島の浦まではまったく濃霧がなく，漁船も安全に航行できたという。漁師はこれを磯前明神がこの地に降臨したためと捉え，大洗磯前神社を豊漁の神，航海安全の神として崇敬するようになった（大洗町史編さん委員会編，1986：344-345）。また，祭神が降臨したとされる「神磯」や（写真2），神社が鎮座する大洗山が周辺の漁師たちの航行のアテとされたことも，漁師からの信仰を集める要因となった。

他方で，大洗磯前神社は「薬師菩薩名神」の名を称したことから，医薬や疾病平癒の神としても信仰が篤かった。とくに，境内にある「大洗みたらし」の霊水が眼病に効用があるとされ，天保期（1830～44年）ごろには霊水を求めて他国から多



写真2 大洗磯前神社下の神磯
(2015年11月 卯田撮影)

くの参拝者が訪れた（大洗町史編さん委員会編，1986：346）。この医薬の神としての信仰は後述するように現在も継続している。

II-2 大洗磯前神社の境内景観と年間祭事

大洗磯前神社の社殿は小田氏治の乱による焼失後，現在の一ノ鳥居前に一時仮遷座していた（写真3）。現在地である大洗山上に移築されたのは1730年であり¹⁾，その後山上への石階も整備された。この時に造営された本殿および拝殿は茨城県の重要文化財に指定されている。

大洗磯前神社の境内地は明治初年ごろには13町7反余りであった。しかし，その後の上知令によって多くが没収され，以前の4分の1程度にまで減少した。この収公に対し，神社側は政府関係者への働きかけや境内地払下げの訴訟などを進めた。その結果，1926年4月に約8町，さらに1927年4月には約1町が編入された（岡田，1981：181-189）。

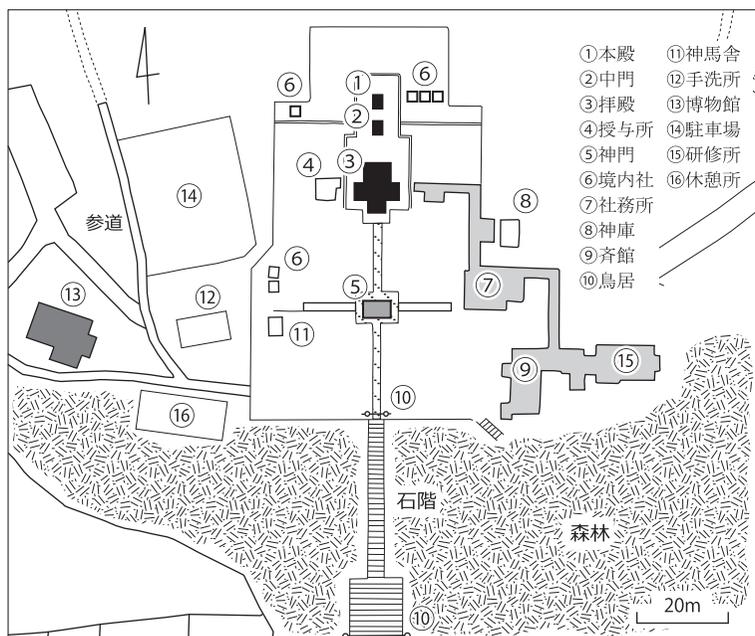
次に，明治初期ごろの境内の様子を『大洗磯前神社真景図』（1884年）からみると，海岸沿いか



写真3 大洗磯前神社の一ノ鳥居

（2015年5月 卯田撮影）

ら山上の本殿まで2つの鳥居があり，麓の二ノ鳥居付近には休憩所や茶屋が数軒建ち並んでいる。この鳥居をくぐって石階を上ると，八幡宮や稲荷などの境内社があり，その先に髓神門，そして拝殿，本殿の配置となっている。第2図は現在の大洗磯前神社の境内を示したものである。社殿の配置は明治初期ごろと概して変化はない。ただし，左部に駐車場や休憩施設，大洗海洋博物館（現在



第2図 大洗磯前神社の境内（2015年）

（岡田（1981），現地調査より作成）

の博物館は1997年8月に開館)が新たに整備された。また、現在境内には境内社が7社鎮座している。具体的には、與利幾神社、弟橘比賣神社(以上、摂社)、金刀比羅神社、神明社、八幡宮、御嶽神社、水神社(以上、末社)であり、そのうち與利幾神社、弟橘比賣神社、金毘羅神社は漁業に関わる神を祀っている。これら境内社の社殿はいずれも氏子や信徒の寄付によって造営されたものである(岡田, 1981: 110-120)。

また、大洗磯前神社は各地に分社が存在する。第3図は大洗磯前神社における分社の分布を示したものである。分社は全国に40社確認されており、そのうち東北地方には秋田県9社、福島県6社、青森県3社など、全体の約半数が鎮座している。分社は、大洗磯前神社が繁栄していた中世から近世初期にかけて、遠方へ移動した領主の要請により創建されることが多かった。たとえば、太田城(現在の茨城県常陸太田市)の城主佐竹義瞬が久保田城(現在の秋田県秋田市)へ国替えになった際、大洗磯前神社の別当であった山伏が佐竹氏に随行

し、移住先の城下に磯前神社を分社した。この地では大洗磯前神社を漁撈の神として崇敬し、江戸時代には代参が行われた。ただ、分社の立地をみると、福島県の一部や埼玉県、山梨県、岐阜県などの内陸部に鎮座する神社が確認できる。また、神社名の中には薬医神社(福島県いわき市)、医薬神社(同県伊達市)、薬師神社(埼玉県川越市)などの医薬関係の社号がみられる。神社関係者への聞き取りによると、内陸部の神社では漁撈の神ではなく、医薬の神として信仰されていることが多いという。

次に、大洗磯前神社の年間祭事について概観する。第2表は2015年現在の大洗磯前神社における主な年間祭事を示したものである。以下では主要な祭事について述べる。

8月の八朔祭は大洗磯前神社の重要祭事である。八朔祭は天孫系の鹿島神と香取神の二神が、大洗磯前神社の祭神である出雲系の大己貴命に国譲りを迫る古代神話に由来する神事とされる(神祇院編, 1972: 120-121)。古来は旧暦8月1日に



第3図 大洗磯前神社における分社の分布(2015年)

(大洗磯前神社社務所蔵資料より作成)

第2表 大洗磯前神社における主な年間祭事

年月	行事名
1月1日	歳旦祭, 初祈禱, 若水祭, 初日の出奉拝式
2月3日	節分祭追儺神事
2月11日	紀元節祭
2月17日	祈年祭, 軍艦那珂忠魂祭
3月21日	春分祭, 春季慰霊祭
4月第2日曜	太々神楽祭
4月23日	御嶽神社祭
5月9日	茶釜稲荷神社祭
6月30日	夏越大祓式, 茅輪くぐり神事
8月25日	八朔祭(例大祭)
9月23日	秋分祭
10月17日	神嘗祭奉祝祭, 献饌講献穀祭
11月3日	明治節祭
11月11日	有賀祭(秋季神事祭), 虫切り祈願祭
11月15日	七五三こども祭
11月23日	新嘗祭
12月23日	天長節祭
12月31日	年越の大祓式, 除夜祭

注) 毎月1日・15日午前10時より月次祭。

(岡田(1981), 大洗磯前神社HPより作成)

鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）の神官が大洗に下向して神事を執り行っていた。江戸時代になると大洗磯前神社の末社である鹿島神社（茨城町宮ヶ崎）と神明雷神社（同町網掛）が鹿島神宮に代わり祭事を執行するようになった。昭和初期の記録によると、当日は両社の神官をはじめ7名が馬に乗り、多数の氏子がそれに随行して行列を組みながら大洗磯前神社へ向かった。その際、一行は大洗磯前神社の神域を示す注連竹・注連縄を切って、出雲を征服する形で参入した。この記録には当時の祭礼の情景についても記されており、それによると、数万の見物人が取り囲む中で行列が進行したとされ、盛況を呈していたことがうかがえる（久信田、2010）。

また、近年は八朔祭の前週土曜日に大洗磯前神社と大洗町（祭実行委員会）共催の宵祭が開催されている。宵祭では町内の4つの商店街を会場に模擬店や各種イベントが催されるとともに、山車3台が町内を回って祭りを盛り上げる。山車の参加者は町報などで呼び掛けられ、毎年子ども60名、大人100名ほどが参加している。

11月の有賀祭（秋季神事祭）は水戸市の有賀神社（有賀町）の御神体を大洗磯前神社へ渡御する祭礼である。この祭は「有賀様の磯下り」とも称され、潮水で神威を清める浜降り神事（浜降り祭）の一形態とも考えられている（藤田、2002：293-296など）。有賀神社からの渡御は、かつて有賀神社の神官が馬上で神矛を奉じる形をとっていたが、その後は馬車に神矛を乗せて渡御するようになった。現在の渡御は自動車により行われる。また、道中には御仮屋や休憩所が設けられ、笹神供と呼ばれる有賀神社の御札が販売されている。

祭礼当日、午前6時ごろに有賀神社を出発した御神体は末広町広場（水戸市）、髭釜道祖神社（大洗町）を經由し、午前11時ごろに大洗磯前神社へ到着する。到着後、有賀神社の宮司から大洗磯前神社の宮司へ御神体の御神鉾が渡される。祭礼ではこの渡御に加えて、両社から供物が奉納される。有賀神社からは山の幸として新米、柚子、里芋が大洗磯前神社へ、大洗磯前神社からは海の幸

が有賀神社へ納められる（前川、2010：156）。また、有賀神社は幼児の虫切りの神としても著名であり、毎年祭には幼児を背負った親が沿道や境内に多数詰めかける。ただ、この虫切りについては江戸時代に編纂された『大洗磯前神社本縁』に記されておらず、虫切りの意味がいつごろから生じたかは定かではない（村田、1990）。

その他の祭事としては、1月1日に歳旦祭が執り行われる。当日は午前零時の昇殿祈祷の後、午前6時45分ごろに神社関係者が神磯に下り、初日の出奉拝の式が挙行される（写真2参照）。神磯付近の海岸には毎年遠方地域を含めて多くの参拝者が訪れ、初日の出を拝する。

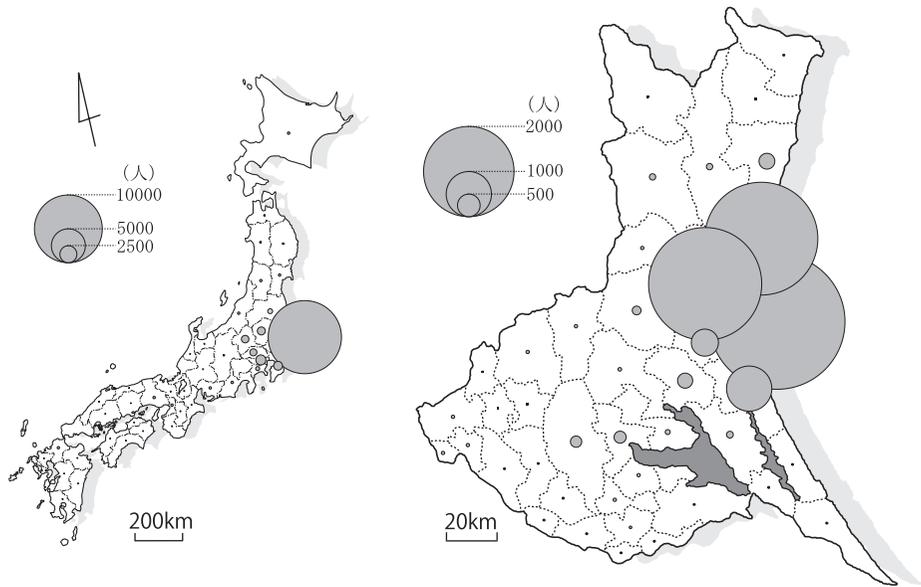
Ⅲ 大洗磯前神社における信仰形態の諸相

Ⅲ-1 昇殿祈願からみた大洗磯前神社の信仰圏

神社に対する具体的な宗教行動のひとつに昇殿祈祷がある。昇殿祈祷とは神社の社殿に上がり、神官から祈祷（祝詞）を受け、終了後に祈祷札と徹下品（神酒、カツオ節）などを受け取るものである。この行動は社殿前での拝礼（いわゆる二拝二拍手一拝）に比して、その神社への信仰や結びつきが強く表出されていると考えられる。本節ではこの点を踏まえ、大洗磯前神社社務所所蔵の昇殿祈祷者の資料をもとに、信仰者の範囲や信仰実態について検討する。当資料は2012～14年における昇殿祈祷者の県別および市町村別（茨城県のみ）の件数記録である。この期間における昇殿祈祷者の総数は18,996人である。

大洗磯前神社の昇殿祈祷は祝祭日を問わず受け付けている。祈祷を希望する者は事前に予約する必要はなく、自身の都合がよい日時に神社へ赴き、祈祷を受けることができる。祈祷時刻は定められておらず、先着者から順に執り行われる。一回あたりの祈祷時間は通常20～30分程度である。

第4図は大洗磯前神社における昇殿祈祷者の分布を示したものである。それによると、昇殿祈祷者は茨城県を中心に広範囲に及び、千葉県、埼玉県、東京都、栃木県を外縁部とする半径150～



第4図 大洗磯前神社における昇殿祈祷者の分布（2012～2014年）

（大洗磯前神社社務所所蔵資料より作成）

200km圏内に分布している。都県別の昇殿祈祷者数をみると、茨城県が12,755人と最も多く、全祈祷者の約7割を占めている。次いで、東京都1,666人、埼玉県1,047人、千葉県1,027人、栃木県808人の順となっている。

次に茨城県における市町村別の昇殿祈祷者数をみると、大洗町が2,858人と最も多い。当町は後述するように大洗磯前神社の氏子地域にあたる磯浜町を含んでおり、そのことが祈祷者数に反映していると考えられる。次いで、水戸市2,490人、ひたちなか市2,460人、鉾田市976人、茨城町591人、小美玉市309人、那珂市278人、土浦市252人などとなっており、主として大洗町近隣の市町が多い。これを茨城県内の地域区別にみると、県央地域は県全体の51.3%、県北地域は27.8%、県南地域は9.1%、県西地域は1.9%、鹿行地域は9.9%となり、県央および県北地域が全体の約8割を占めている。以上のことから、昇殿祈祷者の中心は、大洗磯前神社を中心とした半径40～60km圏内であることが看取される。

昇殿祈祷者の参拝時期は、かつては1月と8月の例大祭が大半を占めていた。しかし、近年にな

るとこれらの時期は全体の半数程度に減少し、分散化の傾向が顕著である。これは水戸大洗ICの開通に伴う交通利便性、とくに北関東からのアクセスの向上が関係している。昇殿祈祷者の祈願内容については、家内安全や商売繁盛、厄除けなどが多いものの、大漁祈願や航海安全も少なくない。また、大洗磯前神社は薬師菩薩との結びつきが強かったこともあり、病氣平癒や医師および医薬品関連業者による祈願も多い。

昇殿祈祷者の信仰形態をみると、個人や家族単位が多く、講社による祈祷はほとんど行われていない。しかし、1960年代ごろまでは医薬品関連の会社や組合を縁とした講社が存在し、総参や代参が盛んに行われていた。また、これら医薬品関連に加えて、大洗磯前神社の分社を崇敬する者からの昇殿祈祷もみられる。大洗磯前神社から遠方の青森県、秋田県、福島県、石川県などにおける昇殿祈祷者の中には分社の崇敬者が少なからず存在している。加えて、Ⅲ-4で詳述するように、大洗町を中心に漁師による祈祷もみられる。

Ⅲ-2 大洗磯前神社における氏子関係組織と活動

1) 氏子組織

大洗磯前神社の氏子地域は大洗町北部の磯浜町を範囲とする。氏子組織の役員には大世話人、世話人、若衆頭などが存在し、そのうち大世話人2名が各地区の代表者である氏子総代に就任する。また、各地区の氏子総代の中で責任役員6名が選出される。氏子総代の選出方法は輪番制であり、任期は2～3年である。かつては世襲とされ、本家出身者や地域の有力者が務めていた。しかし、戦後になると輪番制に変更する地区が多くなった。また、現在は後継者不足から氏子総代を10年以上続けている者も少なくない。

氏子総代は神社と氏子の仲介者という役割を担う。具体的な活動としては、大洗磯前神社の主要祭事である歳旦祭、八朔祭、有賀祭、太々神楽祭などの事前準備や当日の受付、参列者の接待などである。有賀祭の時は多数の参拝者が詰めかけるため、警備や交通整理も行う。また、歳旦祭では氏子総代全員が社殿に入り、午前零時から執り行われる一番祈祷（初祈祷）を受ける。ただし、近年は氏子総代の中でも一番祈祷を受けない者が多くなった。

神社関係者によると、大洗磯前神社と氏子の関わりは氏子総代が中心であり、各地区の氏子は祭礼の参加や見学などを除き、年間を通して関わる機会は多くない。ただし、昇殿祈祷者の分布をみると大洗町が多く、氏子の中にも毎年個人や家族一同で昇殿祈祷を受ける者も少なくないという。

2) 敬神婦人会

敬神婦人会は氏子地域の女性を対象として、1969年9月に永町の住民により結成された組織である（岡田，1981：287）。神社関係者によると、結成当初は各種の活動が盛んに行われていたが、その後は停滞した。しかし、近年になって活動が再開されたという。現会員数は約150名であり、そのうち年間を通して活動に参加する者は70～80名である。

敬神婦人会の主な活動は、祭礼時における参列者の接待や、境内の清掃および植樹などである。また、七五三詣の際には参拝者にお手玉の奉製も行っている。

3) 氏子青年会

氏子青年会は氏子地域の青壮年層を中心に結成された組織である。この会は若い世代が大洗磯前神社との紐帯を強化し、神社の精神を継承させたいとの現官司や一部の氏子の意向によって3年ほど前に結成された。結成に際しては、町内のイベント関係者を中心に呼び掛けられた。現会員数は約20名である。会員の中には氏子地域以外の者も少数ではあるが存在する。

氏子青年会の主な活動は、節分祭および太々神楽祭に使用される餅の準備（もちつき奉仕）や、参道の清掃、神饌田での米づくり、有志による神磯での禊みそぎなどである。そのうち、神饌田での米づくりは会員とその子どもたちが田植えや稲刈りを体験する取り組みである。収穫した米は神社へ献納後、会員に振る舞われる。また、2014年ごろからは専用のSNS（Facebook）を立ち上げ、会員同士の情報交換や活動の告知などが行われている。

氏子青年会は結成から3年ほどしか経過していないこともあり、活動内容は限定的である。会の関係者によると、今後は活動をさらに拡大・充実するとともに、氏子地域内外における会員の勧誘も積極的に進めたいとしている。

Ⅲ-3 大洗磯前神社における講組織

1) 太々神楽講

太々神楽講は毎年4月の第2日曜日に執り行われる太々神楽祭の運営を担う組織である。太々神楽祭は氏子の子女が舞女として神楽舞を奉納する祭礼であり、古くは田楽・申楽の舞や能舞などが奉納されていた（大洗町史編さん委員会編，1986：350）。また、昭和初期ごろまでは4日間に渡って祭礼が行われていたが、1980年代後半以降は2日に短縮され、現在は日曜日の1日となった。

太々神楽講の講員は氏子であり、現在は約500名が加入している。講の代表者は大世話人と呼ばれ、講の取りまとめや舞女の選定を行う。この大世話人の下に講元と呼ばれる役員がおり、講員の人数把握や準備日時の連絡および調整を行う。

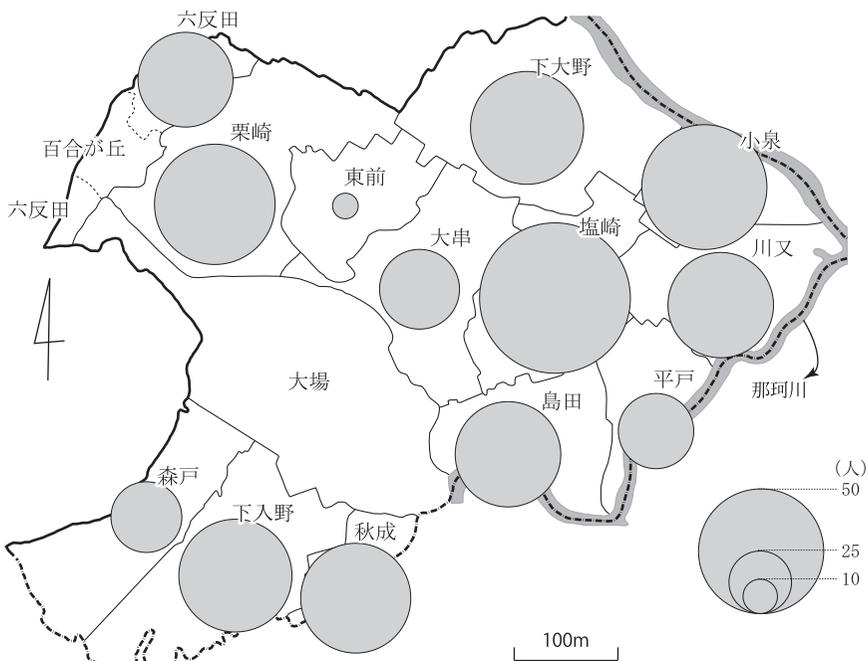
舞を奉納する舞女は原則として氏子地域の小中学生から4名一組の2組計8名が選ばれる。舞女の選定は大世話人に一任されており、大世話人自らが氏子地域を回って依頼する。しかし、近年は少子化の影響から氏子地域外に居住する知人に依頼することも多くなった。

2) 大洗磯前神社献饌講

大洗磯前神社献饌講（以下、献饌講）は大洗磯前神社に神饌を献納する組織である。神饌は一般に神社所有の神饌田（宮田）、あるいは氏子および崇敬者からの献納により調製される（岩井・日和，2007）。大洗磯前神社においても古来よりこ

うした方法によって献供されてきた。しかし、戦時期になると物資の配給統制の影響から大洗磯前神社へ献納する米が不足するようになった。この状況を受けて、大洗磯前神社の崇敬者であった勝田町（現在のひたちなか市）の黒澤忠次が有志とともに茨城県献饌講を結成し、白米や野菜を献納した。その後、この活動が東茨城郡大野村、稲荷村、大場村（現在の水戸市常澄）に紹介され、1955年に当地域の住民を中心に献饌講が結成された。結成当初は講員200名余りであったが漸次増加し、1970年代には600名に達した（岡田，1981：287）。2013年現在の講員数は約500名である。

第5図は2013年における献饌講の講員の分布を示したものである。各地区の講員数をみると、塩崎地区が58名と最も多く、次いで小泉地区47名、栗崎地区46名、下入野地区43名、下大野地区43名、秋成地区42名などとなっている。献饌講の組織は講の代表者である講元、その下に副講元、また各



第5図 大洗磯前神社献饌講における講員の分布（2013年）

注1）六反田は百合が丘を挟む2地区の合計を示している。

注2）大場地区は講員数不明のため記載していない。

（大洗磯前神社社務所蔵資料より作成）

地区の代表である世話人（大世話人ともいう）により構成される。副講元は稲荷、下大野、大場の3地区の中でそれぞれ2名選出される。

大洗磯前神社への献納は毎年各地区の世話人が講員の農家から米1～2升を受け取り、10月の献饌講献穀祭に合わせて車で大洗磯前神社まで運ぶ。世話人は祭礼終了後に神社から家名または講名入りの神札を貰い受け、この札を講員へ配布する。

講員が居住する地区の中には氏神の祭礼時に収穫した米を神饌として献納する地区がある。しかし、なかには氏神に献納せず、大洗磯前神社のみに献納する地区も存在する。また、献納する米の栽培は通常の栽培方法と同様であり、神饌専用の田から米を栽培する方法は採られていない。献饌講の講員や神社関係者への聞き取りによると、20年ほど前までは常澄地域の農家のほとんどが加入していた。しかし、近年は農業の衰退や社会構造の変化から講を脱退する農家もみられるようになったという。

Ⅲ－4 大洗町の漁師における大洗磯前神社の信仰

大洗磯前神社は漁師との結びつきが強い。とくに、大洗町の漁師は出初め式や八朔祭などには大洗磯前神社へ参拝する。しかし、近年になるとこうした信仰に変化がみられるようになった。本節では、漁師における大洗磯前神社の信仰の以前および現在の動向について検討する。以下では、以前の信仰を主に『大洗町史』所収の民俗資料、現在の信仰を漁師への聞き取りから分析する。本節で資料とする『大洗町史』には漁師の信仰に関する項目として「海への信仰」があり、年中行事や船霊に関する民俗事例の詳細な記述がみられる。また、『大洗町史』は1986年刊行であることから、所収の民俗は当年以前に行われていたものと位置づけることができる。

漁師と大洗磯前神社との関わりは主に年始を中心とした年中行事と、漁業自体に関わることの2点がある。そのうち、前者では正月や出初め式に

関わりがみられる。『大洗町史』によると、元日に漁協の役員数名が代表者となり、大洗磯前神社への参拝および昇殿祈祷が執り行われた。また、当日は漁師の間でカケノイと呼ばれる行事が行われる。カケノイとは保存しておいた魚を自宅の神棚と船内の船霊様に供えるものである。船へ魚を供える際は、御神酒をトリカジ（左舷）、ミヨシ（舳先）の順にあげ、次にトリカジから「龍神神に」と言って海にまく。そして、最後にオモカジ（右舷）に回り、御神酒を飲む。その間、誰とも話してはいけないことになっている。

出初め式では船霊様とオモテ（船首）にアラシオ（海水）をかけて清め、大漁旗を掲げて出港する。海上に到着後、大洗磯前神社と鹿島神宮に向かってトリカジをそれぞれの神社へ向けるようにして三回旋回し、御神酒を海へ、アラシオを船霊にまく。帰りはオモカジ回りで帰港する。大洗港にイワシの揚繰船があつたころは出船の順番を元日に大洗磯前神社でくじ引きをして決めていた。出初めの日は大抵儀礼のみで漁は行われぬが、この日の海産物を大洗磯前神社へ献納する者も多かった（大洗町史編さん委員会編、1986：927-928）。

こうした漁師と大洗磯前神社との関わりは、かつては一般的に行われていたとされる。しかし、現在は衰退の傾向にある。漁師および漁協関係者によると、元日の漁協役員による大洗磯前神社への昇殿祈祷は続けられているものの、カケノイは現在3分の1程度しか行われていないという。また、出初め式については、以前はほとんどの船が出港し、大洗磯前神社と鹿島神宮への儀礼が行なわれていたが、現在は数隻が神磯まで赴き、引き返してくるだけという。また、揚繰船は現在大洗港ではほとんどみられなくなったため、くじ引きは行われていない。

次に、漁業自体については漁船の進水式が挙げられる。進水式では完成した船に船大工が乗り込み、大工の棟梁が四方に餅をまく。進水後、一度岸壁に船を着けて船大工は降りる。入れ替わりに船主とその関係者が乗船し、大洗磯前神社と鹿島神宮の方向へ船を向ける。その際の作法は、はじ

めに鹿島神宮の方向に船を出し、右回りに旋回しながら、アラシオと御神酒を船霊、オモテ、トモの順にかける。次に大洗磯前神社の神磯付近まで行き、また右回りに旋回し、鹿島神宮の時と同様にアラシオと御神酒をかける。両神社への作法で多用される右回りの旋回は、オモ舵側にある船霊を神社に近づけるためである（大洗町史編さん委員会編、1986：907）。

現在、船の新造自体が少なくなったものの、新造の際は進水式を実施する漁師もいる。漁師への聞き取りによると、現在の進水式は以前の手順とは異なり、進水した後に大漁旗を掲げて神磯の前で礼拝し、その後、船を岸壁につけて船主が餅などをまくという。

他方で、漁師は一般に周辺あるいは遠方の漁業に関わりのある複数の社寺へ参拝することが多い（阿部、2007など）。この点は大洗町の漁師にもあてはまり、当地域の漁師たちは大洗磯前神社のほかに、天妃神社（大洗町祝町）や波切不動（銚田市）、静神社（那珂市）などに参拝する。そのうち、天妃神社は海上からのアテとされていたことから、大洗町やひたちなか市の漁師を中心に広く信仰されている。4月30日の天妃神社祭では漁師と市場関係は休みとなり、漁協役員が天妃神社に参拝している。また、波切不動への信仰は現在衰退の傾向にあるものの、一部の漁師は慰安も兼ねて年一回の参拝を行っている。

IV 大洗磯前神社と観光

IV-1 大洗町における観光の発展と大洗磯前神社

1) 明治後期から昭和戦前期

明治以降の大洗町と観光との関わりにおいて海水浴は重要な位置を占めた。日本における海水浴は明治初期に娯楽性を伴わない病気治療の方法として受容された。この当時、海水の塩分は皮膚を刺激し、その刺激が全神経に及んで肺や血液循環を活性化させる効果があり、また塩分濃度が同一である場合は身体に当たる波が激しいほど皮膚に

与える影響が強いとされていた。最初期の海水浴場である大磯海水浴場（現在の神奈川県大磯町）は塩分濃度が高く、波も高いことが開設の理由とされた（小口、1985）。しかし、明治後半ごろになると、私鉄が都市近郊の遊覧施設のひとつとして海水浴場を多数開設したことで、海水浴は次第に娯楽対象として認知されるようになった。

大洗は古くから大洗磯前神社境内や神磯を中心に景勝地として知られ、江戸末期には鳥居前に料理屋が開かれた。明治中期以降になると、景勝地に加えて海水浴場としても注目されるようになった。たとえば、1895年刊行の『大洗海水浴場誌』には、「大洗ハ東海稀有ノ海水浴場ニシテ余其勝ヲ耳ニスルコト久シ」として、大洗岬周辺における海水浴場の特性とその意義が詳細に報告されている（高橋、1895）。また、茨城県内の海水浴場（12か所）を記した『常陸の海水浴』（1902年刊行）では、湊浜、平磯浜、助川、川尻浜などとともに大洗と磯浜が紹介されている。書中では大洗の海岸沿いについて、「曼々たる蒼海目を遮るもの無く、水上一青、時に帆船の風に乱れて白鷺の如く點々雲に遡るを見る」と記された（滝、1902：32）。

こうした海水浴場としての注目に伴い、大洗磯前神社周辺では海水浴客を対象とした旅館が相次いで開業した。先の案内書によると、海岸付近には金波楼（1890年開業）や大洗ホテル（1900年開業）、魚来庵（先の料理屋）などが開業した。また、これら海水浴場を紹介した案内書の多くは大洗磯前神社に関する記述がみられた。たとえば、『常陸の海水浴』では「大洗」の節の中に「大洗磯前神社」の項目があり、大洗磯前神社の由緒・歴史や境内の情景について記されている。また、1910年刊行の『避暑案内』の大洗の項の中にも大洗磯前神社の説明が付されており（大浜、1910：233-234）、当地域が海水浴場として発展する中でも大洗磯前神社が以前と変わらず名所地として位置づけられていたことがうかがえる。

大正中期以降になると、大都市を中心に観光が生活スタイルの中に定着し、海水浴や登山、スキー

などの多様な観光形態への関心が高まった。とくに、この時期は私鉄による観光開発が盛んに行われた。海水浴場についても私鉄を中心とした開発資本によって、大都市圏から海浜地域への鉄道敷設や遊園施設の建設などが精力的に進められた。その中で、大洗周辺においても鉄道が敷設された。水戸駅から大洗へ至る路線の計画は、明治30年代の磯湊鉄道を嚆矢として、以後も鉦田祝町馬車鉄道、水戸磯浜鉄道などにより計画が進められた。しかし、これらの計画はいずれも頓挫した。その後、1921年に太田町（現在の常陸太田市）の豪商竹内権兵衛を発起人とする水浜電車株式会社（以下、水浜電車）が水戸と磯浜を結ぶ路線を計画し、1922年12月に浜田―磯浜（現在の大洗町大貫町付近）間8.7kmが開業した。1925年2月には大洗駅（現在の大洗磯前神社駐車場付近）を経て祝町駅へ至る13kmが延伸開通した（中川、1981：251-254）。

以上の鉄道敷設によって、これまで主に汽船や馬車を要した大洗へのアクセスが飛躍的に改善し、海水浴客を中心に多くの観光客が訪れるようになった²⁾。1924年上期における水浜電車の営業報告書を見ると、「春季修学旅行に際し、一般乗客は勿論、県外各地より多数の団体客あり」とされ、同年下期の営業報告書では、「七月下旬より、俄然海水浴客殺到し、八月下旬に至るまで、十台の電車を連続運転するも逆に苦しむ状況、磯浜、大貫、日々数万の人出を以て埋る空前の盛況を呈したり」と述べられており、多数の観光客が訪れていたことがわかる（茨城交通株式会社三十年史編纂委員会編、1977：11）。また、水浜電車では乗車人員のさらなる増加を目指し、納涼電車や酒沼川花火大会などの各種催し物を企画した。

当時の大洗周辺を記した紀行文によると、「旅館に魚来庵、金波楼、小林楼などがあつて皆相当に設備は出来てゐるが、盛夏の候と観梅のシーズンは、何処も満員で、初めての客が不意に行つても、空室がなくて断られる」との状況だった（松川、1928：310）。その中で、観光客は海水浴とともに大洗磯前神社へ訪れることが多く、先の紀行

文の中にも大洗磯前神社を詠んだ写生詩が掲載されている。この当時の大洗磯前神社下の一ノ鳥居周辺には旅館・ホテル5軒、別荘6軒、売店（写真屋を含む）5軒が集中しており、大きな賑わいをみせていた（石井、1979：3-5）。

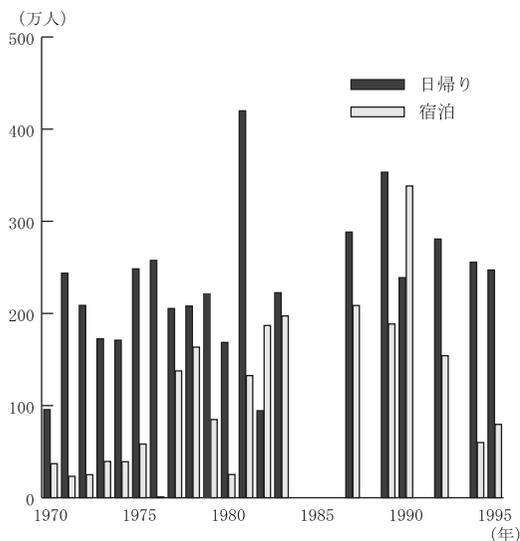
2) 戦後期

戦後の観光は終戦5年ごろから回復の兆しを見せ始め、従来の名所旧跡巡りや海水浴、登山などが復活した。昭和20年代後半ごろになると、大洗においても海水浴が漸次行われるようになり、磯浜町周辺の海岸には戦前期と同様に多くの海水浴客が訪れた。その後、1951年に大洗から那珂湊、常澄、酒沼周辺を含む地域が大洗県立自然公園に指定されたことで観光客が増加した（江原、1960：151）。

他方、このころには茨城県や大洗町（1954年合併）による観光客誘致の取り組みが本格的に開始された。茨城県では1950年から県内外を対象にポスターやチラシ、キャラバン隊による海水浴場の宣伝が行われた。1952年には新たな観光資源として隣接する海岸沿いに県立水族館が建設され、周年的な観光客誘致が試みられた。また、旧大貫町では県外客獲得のために東武鉄道と提携した直通バスが群馬県桐生や足利から運行された（大洗町史編さん委員会編、1986：806-807）。

その後、高度経済成長期を迎えると、観光やレクリエーションへの関心の高まりを背景に大洗への海水浴客は年間100万人以上、宿泊客も10万人を超えるようになった。1970年には大洗子どもの国プールや水族館が開業し、夏季シーズンを中心に観光客が増加した³⁾。第6図は1970～95年における大洗町の日帰り客数と宿泊客数の推移を示したものである。それによると、日帰り客は1971年以降、年間約200～250万人で推移した。また、宿泊客は1970年代半ばごろまでは年間10万人程度であったが、それ以後は年間100万人前後と大幅な増加をみせた。これは民宿の開設による宿泊環境の向上が関係している。

次に、大洗町の観光における大洗磯前神社の位



第6図 大洗町における日帰り客数と宿泊客数の推移（1970～95年）

注）1984、85、86、88、91、93年はデータ欠損。
 （『茨城の観光レクリエーション現況』各年度より作成）

置づけについて検討する。以下では戦後に刊行された主要な観光ガイドブックの「大洗町」の記載をもとに、観光地大洗と大洗磯前神社との関係について分析する。

第3表は主要ガイドブックにおける大洗町の記載項目（施設名）、および大洗磯前神社の記載内容についてまとめたものである。各ガイドブックの記載項目のうち、観光施設については施設の開業・閉鎖と連動する形で年代ごとに項目が追加・変更されている。たとえば、1960年代に開設した大洗こどもの国プール（海のこどもの国大洗水族館）は2002年3月にアクアワールド茨城県大洗水族館としてリニューアルされるが、ガイドブックでは1967年と1988年に項目があるが、1999年以降はみることができない。また、「大洗のパノラマ風景を眺める」タワーとして1988年10月に完成した大洗マリントワーや2006年3月に開業した大洗リゾートアウトレットは、大洗町の新たな観光スポットと位置づけられ、開業以降に刊行されたガイドブックには頻繁に掲載されている。さらに、2013年以降になると後述するアニメ「ガールズ&

パンツァー」に関わる記述が新たに加わった。

一方で、神社仏閣や名所・旧跡についても観光形態の変化、またガイドブックの性格などから項目が変更されることがある。具体的には、親鸞ゆかりの寺である願入寺は1956年の『房総・水郷と水戸』以降、一部のガイドブックを除いて1970年代後半ごろまで項目が設けられているが、以後はみることができない⁴⁾。その中で、大洗磯前神社は1997年刊行の『マップル 茨城』を除き、いずれのガイドブックでも項目を確認することができる。記載内容を見ると、『房総 水郷』（1964年）では祭神の説明や社殿造営の由来などが説明されている。また、『アイじゃぱん 房総・千葉・茨城』（2003年）や『るるぶ 茨城 大洗 水戸 笠間 14～15』（2014年）などにおいても由来や御神徳などが記されている。さらに、ガイドブックではこうした記述に加えて、大洗磯前神社に関わる写真も掲載されている。写真は主に一ノ鳥居や神磯を撮影したものが多く、とくに神磯は大洗磯前神社だけでなく、大洗町全体を表象するアングルとして採用されることも少なくない。以上から、大洗磯前神社は戦後の大洗町における観光の発展の中でも一貫して重要な観光対象であったことが看取される。

3) 近年の観光動向と大洗磯前神社

県外から大洗町へのアクセスは、これまで主に鹿島臨海鉄道大洗鹿島線（1985年3月開業）や常磐自動車道的那珂ICの利用に限られていた。しかし、水戸大洗ICの開通および北関東自動車道の全通によって栃木県や群馬県からの交通利便性が高まった。この開通に伴い『まっぶる』や『るるぶ』などのガイドブックでは、大洗町を北関東自動車沿いの桜川市やひたちなか市、笠間市などとともに「北関東」をカテゴリーとする新たな観光地として位置づけた。

また、大洗町では水戸大洗IC開通のころから、海産物を対象とした観光客誘致の取り組みが本格的に開始された。ここでは、従来からの岩ガキやシラスなどに加えて、冬季のアンコウが重視され

第3表 主要ガイドブックにおける大洗町の記載項目（施設）と大洗磯前神社の記載内容

書名	出版年	出版社	主な記載項目（施設）	大洗磯前神社の記載内容
房総・水郷と水戸	1956	日本交通公社	大洗海岸、 大洗磯前神社 、常陽明治記念館 願入寺、大洗ゴルフ場	祭神と八朔祭の説明。水戸藩主代々の崇敬。日の出の壮観も名高い
房総 水郷	1964	日本交通公社	大洗海岸、ヘルスセンタービーチパレス、 大洗磯前神社 、海洋博物館、常陽明治記念館、大洗ゴルフ場、願入寺	「おあらいさま」で知られる。水戸藩主代々の尊敬。戦前までは国幣中社。子ノ日原から祝町までの神林。八朔祭の説明
房総・水郷	1967	日本交通公社	大洗海岸、大洗ビーチパレス、 大洗磯前神社 、海洋博物館、常陽明治記念館、大洗ゴルフ倶楽部、海のこどもの国、願入寺	上記と同内容
JTBの新日本ガイド 房総・水郷・茨城	1988	JTB	大洗海水浴場、 大洗磯前神社 、常陽明治記念館、大洗水族館、大洗海浜公園、マリントワー、大洗サンビーチ、大洗海洋博物館 山村暮鳥詩碑、願入寺、巖船の夕照碑、こどもの国	磯節に「磯で名所は大洗様」の歌詞。家門繁栄・交通安全の神として崇敬
マップル 茨城	1997	昭文社	大洗水族館、大洗海洋博物館、大洗マリントワー、大洗美術館、常陽明治記念館、大洗サンビーチキャンプ場、県立大洗海浜公園	
歩く地図 房総・筑波・常磐	1999	あるつく社	大洗水族館、願入寺、幕末と明治の博物館 大洗キャンプ場、大洗海岸公園、 大洗磯前神社 、大洗海洋博物館、大洗美術館、大洗マリントワー、大洗魚釣り園、大洗海浜公園	神磯鳥居が立つ大洗岬の背後にある古社。祭神の説明。家内安全・海上安全の神として崇敬。境内のツツジ
アイじゃぱん 房総・千葉・茨城	2003	JTB	大洗マリントワー、大洗美術館、 大洗磯前神社 、大洗海洋博物館、幕末と明治の博物館	斉衡3年に創建。社殿は徳川光圀の再興。高さ16mの大鳥居
まっふる 水戸・水郷・つくば	2013	昭文社	大洗リゾートアウトレット、大洗マリントワー、 大洗磯前神社	斉衡3年に創建。社殿は水戸藩主より寄進
るるぶ 13～14	2013	JTB	アクアワールド大洗、大洗マリントワー めんたいパーク、大洗リゾートアウトレット、幕末と明治の博物館、 大洗磯前神社	平安時代に創建。家々の繁栄を守る古社
るるぶ 茨城 大洗 水戸 笠間 14～15	2014	JTB	アクアワールド茨城県大洗水族館、鹿島臨海鉄道大洗駅、大洗まいわい市場、大洗マリントワー、 大洗磯前神社	海上安全と家内安全を祈願する古社。斉衡3年に創建。水戸藩主が再興。『ガルパン』ファンによる痛絵馬の奉納
まっふる 茨城 水戸 つくば	2014	昭文社	アクアワールド茨城県大洗水族館、大洗マリントワー、 大洗磯前神社 、ゆっくら健康館、大洗リゾートアウトレット	目印は巨大な鳥居。斉衡3年に創建。社殿は水戸藩主より寄進

注1) 空欄は記載なしを示す。

注2) 「主な記載項目（施設）」の施設名は書籍中の記載による。

(各ガイドブックより作成)

た。アンコウはかつて漁師が自家用として食すことが一般的であったが、1990年代以降にテレビ番組で頻りに紹介されたことをきっかけに注目されるようになった。現在、大洗町観光協会では11～

3月をあんこう鍋フェアとし、首都圏を中心に積極的な宣伝活動を展開している。また、このアンコウに関しては2005年から誘致活動の一環として、「^{あんこう}鮫鯨奉納包丁式」がホテル・旅館関係者に

より行われている。これは、装束姿の調理師たちが一刀一札の作法に則り、アンコウに直接手を触れないで包丁と真魚箸のみでおろすものであり、大洗ホテルの料理長が発案し、現在まで続けられている⁵⁾。包丁式は大洗磯前神社で執り行われ、肝や胃など7つの部位を切り分け、幣殿に奉納される。また、部位の一部は観光客にアンコウ汁として振る舞われる。

他方で、大洗磯前神社においても水戸大洗ICの開通と関わる取り組みが進められた。具体的には、初詣者のアクセシビリティの向上と団体ツアーの対応である。そのうち、前者では初詣時の臨時駐車場の開設と、初詣無料シャトルバスの運行が始められた。臨時駐車場については水戸大洗IC開通後、ICから大洗磯前神社への道路(約5 km)が渋滞するようになり、神社では対策として付近の空き地を借り受け、臨時駐車場として開設した。また、シャトルバスについても初詣者に公共交通機関の利用を促す目的で水戸大洗IC開通後ごろから運行が開始された。シャトルバスは元日から1月3日まで大洗駅—大洗磯前神社の区間を午前7時10分から午後4時40分まで一日18往復運行されている。また、元日は大洗駅を午前6時15分に出発する「初日の出バス」も運行される。

一方、団体ツアーの対応については、旅行会社およびテレビ局関係者による駐車場の有無や神社の歴史・由緒などの問い合わせに対して、神社関係者1～2名が常時対応している。神社関係者によると、こうした問い合わせは水戸大洗IC開通以前からあったが、北関東自動車道全通によって近年は増加傾向にあるという。また、観光地として著名な大洗町やひたちなか市などは団体ツアーのコースとされることが多いが、その中で大洗磯前神社は大洗町内のアクアワールド茨城県大洗水族館やめんたいパークなどととも滞り場所のひとつとして重視されている。たとえば、2015年7月に催行された日帰りツアーでは、千葉県松戸市および流山市を出発点とし、アサヒビール茨城工場(茨城県守谷市)、森田水産(ひたちなか市)、めんたいパーク、大洗磯前神社、国営ひたち海浜公

園を巡るコースが設定された。神社関係者および旅行会社への聞き取りによると、大洗磯前神社への訪問は、アクアワールド茨城県大洗水族館やめんたいパークが混雑した際の時間調整として、30～40分程度滞在することが多いという。大洗磯前神社滞在中の観光客は社殿や神磯など散策する。また、観光客の中には神社の神聖性に魅了され、後日昇殿祈禱を行う者もいるという。

IV-2 アニメ聖地巡礼と大洗磯前神社

1) 「ガールズ&パンツァー」と大洗磯前神社

近年、大洗町はアニメ「ガールズ&パンツァー」(以下、ガルパン)の舞台となったことでアニメファンから注目を集めている。ファンによるアニメ作品の舞台への来訪は「アニメ聖地巡礼」と称され、若者を中心に2000年代以降における観光形態の一潮流となっている。これまでの代表的なアニメ聖地としては、埼玉県鷲宮町(『らき☆すた』)、長野県大町市(『おねがい☆ティーチャー』、『おねがい☆ツインズ』)、兵庫県西宮市(『涼宮ハルヒの憂鬱』)、広島県三次市(『朝霧の巫女』)などが挙げられる(岡本、2009など)。大洗町もこれらの「アニメ聖地」と同様にテレビ放映中からガルパンファン(以下、ファン)が来訪するようになった。その中で、大洗磯前神社においても多くのファンが訪れ、ファン自らが描いたイラスト入りの絵馬(痛絵馬)の奉納が行われている。

ガルパンは戦車道が「乙女のたしなみ」とされる世界において、女子高生たちが戦車操縦を競う姿を描いたものであり、2012年10月から2013年3月にかけてTOKYO MXほかで放映された。アニメの舞台は大洗町がモデルとされ、実在する建物や風景が多く描かれた。とくに、主人公たちが市街地で戦車を走行させる第4話のシーンでは、町内の大洗リゾートアウトレットや大洗マリンタワーなどが登場した。また、同話には主人公が大洗磯前神社の参道や鳥居を通るシーンも描かれた。この回が放映された2012年後半ごろには一部のファンが聖地巡礼と称して大洗町へ訪れるようになった。同年11月に開催された大洗町商工観光

課主催の第16回大洗あんこう祭では、声優らによるトークショーが企画され、入場者数は例年の2倍以上にあたる6万5千人を記録した。

大洗町はこうしたファンを中心とした新たな観光客に対し、継続的来訪のために様々な誘致策を展開した。具体的には、後述するスタンプラリーやクイズラリー、「ガールズ&パンツァー“大洗”聖地巡礼ツアー 2日間」(2013年2月)の開催、地元商店街へのキャラクターパネル54体の設置、大洗駅構内におけるガルパン案内所の開設などである。そのうち、聖地巡礼ツアーは、大洗リゾートアウトレット、大洗磯前神社、アクアワールド茨城県大洗水族館などのアニメの舞台および上記のスタンプラリーのスタンプ設置地点を巡る企画であった。これら一連の取り組みは新たな観光振興策として注目され、2013年6月に観光庁主催「今しかできない旅がある」若者旅行を応援する取組表彰において、観光庁長官奨励賞を受賞した。

先述したように、ファンは大洗磯前神社にも来訪している。神社関係者によると、ファンはアニメ放映中の2013年上半期ごろから訪れるようになった。これは大洗観光協会がファンの誘致として2013年1月に実施した「大洗女子スタンプラリー道」が関係している。このスタンプラリーでは大洗町内に設定された8か所のうち6か所で押印すれば景品が貰える企画であり、大洗磯前神社は大洗リゾートアウトレット、大洗マリンタワー、大洗ホテル、大洗駅などとともに、スタンプ設置地点のひとつとして選定されていた⁶⁾。

加えて、ファンの中には痛絵馬を奉納する者も多く存在する(写真4)。痛絵馬の奉納は地元住民や大洗町へ訪れたことがないファンにその場所が「アニメ聖地」であることを認知させる重要な装置である(岡本, 2009: 138-139; 今井, 2009)。大洗磯前神社への痛絵馬の奉納はアニメ放映中の2012年後半ごろから散見され、先のスタンプラリー期間中に急増した(大洗町商工観光課提供資料による)。神社側ではこの対策として、それまでの絵馬掛け所を廃し、新たに2基を設けた(由谷・佐藤, 2014: 108)。さらに、2013



写真4 大洗磯前神社の痛絵馬

注) 個人情報保護のため写真を一部加工している。

(2014年10月 卯田撮影)

年正月には大洗町青年会議所の役員を中心としたグループによってガルパンの巨大絵馬が制作された。この巨大絵馬は縦約1.8m、横約2mあり、毎年キャラクターの絵柄が変えられている。

大洗磯前神社はアニメの放映以降、ファンを中心とした観光客の増加がみられた。ただ、神社側では大洗町によるガルパン関係の取り組みについては賛同し協力しているものの、神社自らガルパンに関わる絵馬や関連商品の販売は行っていない。

2) 大洗磯前神社へ訪れるガルパンファンと絵馬

本項は大洗磯前神社へ訪れるファンへの聞き取りから、ファンの行動形態と意識について検討する。この聞き取りは2015年8月22日、10月24日、11月3日の3日間に大洗磯前神社の絵馬掛け所において、痛絵馬を見学していたファン16名に対し実施したものである。質問項目は参拝(社殿前での礼拝)の有無、来訪回数、居住地、痛絵馬の奉納の有無、昇殿祈禱の有無などである。聞き取りは1名につき10~15分程度行った。

第4表はファンにおける大洗磯前神社の行動形態についてまとめたものである。それによると、16名のうち約8割にあたる14名がアニメ放映後の2012年以降に大洗磯前神社へ初めて訪れている。その中で、初来訪から現在までの約2年間で10回

第4表 ガルパンファンにおける大洗磯前神社の行動形態（2015年）

番号	年齢	性別	参拝	来訪回数	初めての来訪時期	交通手段	現住地	絵馬奉納	昇殿祈祷	商店街の来訪
1	20代	男性	した	15回程度	2012年	自動車	茨城県鉾田市	なし	なし	する
2	20代	男性	した	5回	2013年	自動車	埼玉県秩父市	なし	なし	する
3	30代	男性	した	10回程度	2013年	鉄道	静岡県	なし	なし	する
4	40代	男性	した	15回程度	2012年	自動車	栃木県宇都宮市	あり	なし	する
5	30代	男性	した	20回程度	2012年	自動車	栃木県宇都宮市	なし	なし	する
6	30代	男性	した	15回程度	2013年	自動車	埼玉県	なし	なし	する
7	20代	男性	した	15回程度	2013年	自動車	千葉県	なし	なし	する
8	20代	男性	した	初めて		自動車	東京都	なし	なし	する
9	20代	男性	した	初めて		自動車	東京都	なし	なし	する
10	40代	男性	していない	10回	2013年	鉄道	神奈川県横浜市	なし	なし	する
11	40代	男性	した	初めて		自動車	東京都	なし	なし	する
12	10代	男性	した	初めて		自動車	神奈川県	なし	なし	する
13	10代	男性	した	月1回	幼少	バイク	茨城県鉾田市	なし	あり	する
14	30代	男性	した	10回以上	2013年	バイク	茨城県行方市	なし	なし	する
15	30代	男性	した	年2～3回	幼少	自動車	茨城県水戸市	なし	なし	する
16	30代	男性	した	3回程度	2012年	自動車	茨城県水戸市	なし	なし	する

注1) 調査日は番号1～3は2015年8月22日、番号4～10は10月24日、番号11～16は11月3日。

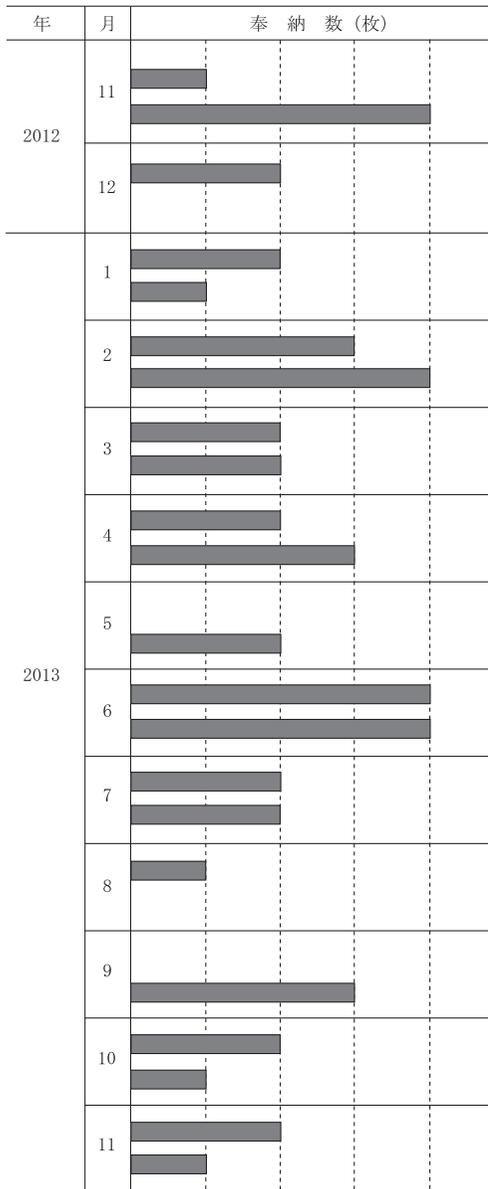
注2) 「絵馬奉納」は痛絵馬の奉納を意味する。

(聞き取り調査より作成)

以上訪れているファンは半数以上の8名存在しており(1, 3, 4, 5, 6, 7, 10, 14)、彼らは月1～2回のペースで大洗磯前神社へ来訪している。来訪のきっかけはガルパンの舞台である大洗町に関心をもったことや、大洗磯前神社の雰囲気惹かれたこととともに、痛絵馬を見学するという意見が多く聞かれた。また、多数の来訪回数を有するファンの居住地をみると、県内および茨城県近隣の都県が多いものの、一部は静岡県と遠方から訪れる者も存在する。他方で、こうしたファンとは異なり、幼少のころから初詣や観光を目的に大洗磯前神社へ訪れている者の中にもアニメ聖地への関心からあらためて来訪する者もみられた(13, 15)。

次に大洗磯前神社での具体的な行動形態について述べる。ファンは参拝後、境内を周遊したり、石階を下りて神磯へ訪れたりすることが多い。その後、絵馬掛け所へ向かい痛絵馬を見学する。ファンによると、痛絵馬は「絵馬師」と呼ばれる一部

の熱心なファンによって随時奉納されており、訪れたファンは新たに奉納された痛絵馬を確認し、デジタルカメラやスマートフォンなどで撮影を行う。彼らの中にはこの確認の行為が大洗磯前神社へ訪れる最大の目的とする者も少なくない。この絵馬師による痛絵馬の奉納について、ここでは絵馬師として有名な^{おがみ}拝身朋幸氏の奉納の推移から検討する(第7図)。それによると、拝身氏は奉納を開始した2012年11月から翌年11月までの1年間で計50枚の痛絵馬を奉納している。月別にみると、平均3～4枚奉納しており、とくに2013年6月には1か月で計8枚を作成・奉納している。拝身氏によると、奉納のきっかけは同月に開催された大洗あんこう祭の参加であり、その後の大洗町の誘致策や、「神社の休憩所の居心地の良さや、大洗の飯の美味さ、観光地としてのポテンシャルの高さ、大洗の熱意の温度の高さ」などに惹かれ、奉納を続けるようになったという(拝身, 2013)。ファンにおいては拝身氏のこうした奉納の頻度から、



第7図 拝身朋幸氏による大洗磯前神社への痛絵馬の奉納の推移（2012年11月～2013年11月）

注1)「奉納数」は1枚単位。

注2)「月」の上段は上旬，下段は下旬を示す。
(拝身(2013)より作成)

先述したようなペースで大洗磯前神社へ来訪していると考えられる。

また、ファンは以上の行動形態に加えて、大洗町の商店街へ訪れる。ファンへの聞き取りによる

と、彼らの多くは午前中に大洗磯前神社へ参拝し、その後に商店街に向かうという。ここからは、ファンの中で大洗磯前神社から商店街への周遊ルートが存在していることが看取される。

V 大洗磯前神社における信仰と観光の特性

本章ではⅢおよびⅣを踏まえ、大洗磯前神社における信仰と観光の特性について考察する。

大洗磯前神社の現在の信仰圏は茨城県中央地域を中心に、半径150～200kmを外縁部とする広大な地域である。昇殿祈禱者の祈願内容をみると、家内安全や商売繁盛、厄除けなどに加えて、大漁祈願・航海安全や病氣平癒が多くみられた。これは、大洗磯前神社における漁師の信仰と、医薬の神としての信仰が関係している。そのうち、前者ではとくに大洗町の漁師によって元日や出初め式の際に大洗磯前神社への儀礼が行なわれてきた。ただし、現在は漁業の衰退や社会構造の変化を背景に、両者の関係は希薄になりつつある。一方、後者についてはかつて医薬品関連会社や組合を縁とした講社が存在し、総参や代参が盛んに行われていた。現在でも個人を単位とした参拝が少なくない。また、全国に分布する大洗磯前神社の分社の中には医薬の神として崇敬されている神社も存在しており、医薬は大洗磯前神社の神徳のひとつとして重要な位置を占めている。

大洗磯前神社は以上の信仰形態に加えて、氏子関連組織と講組織が活動している。その中で、献饌講は大洗磯前神社の崇敬者を基盤とした組織として注目される。献饌講は大洗磯前神社への神饌の献納を目的に結成された組織であり、毎年10月の献饌講献穀祭に合わせて米が献納される。この献納については、講員が居住する地区の氏神には行わず、大洗磯前神社のみに献納する地区も存在する。こうした献納の形態からは、大洗磯前神社は講員にとって地域の氏神とは異なるスケールに位置していることがうかがわれる。

他方で、大洗磯前神社が鎮座する大洗町は明治末以降、海水浴を中心とした観光地として大きな

発展を遂げた。とくに、鉄道開業後はアクセスの向上もあり、当地域には多くの観光客が訪れた。また、戦後になると海岸沿いには観光施設が相次いで開業し、1970年代以降は年間100万人以上の観光客が訪れる一大海浜観光地域となった。この大洗町の観光と大洗磯前神社との関係について、主要ガイドブックをもとに検討すると以下の点が明らかとなった。すなわち、ガイドブックにおける「大洗町」の記載項目では、当地域の観光の進展に伴って様々な観光施設が追加・変更されていたが、大洗磯前神社は名所地としてほとんどのガイドブックに項目がみられた。こうした点からは、大洗磯前神社は大洗町が観光地として発展を遂げた戦後から現在に至るまで当地域の観光資源のひとつとして重視されていたことがわかる。

一方、大洗町の観光開発に注目すると、大洗磯前神社と観光とのもうひとつの関係を指摘することができる。大正末以降における観光開発を主導した私鉄は都市近郊地域を中心に、観光地への鉄道敷設や遊園施設の建設・拡充を精力的に展開した。その中で、聖地に対しても観光対象と位置づけ、開発を進行した。たとえば、都市近郊の霊山では山上へのケーブルカーの敷設とともに、山上に立地する社寺周辺に遊園施設やホテルなどを整備した。私鉄にとってこうした聖地を視野に入れた開発は、既存の参拝者とともに、新規の観光客の獲得といういわば二方向からの集客を可能とする点で重要な意味を有していた。また、聖地側においては以上の開発傾向に対して、参拝者の増加および教線の拡大から、開発資本への協力を積極的に進めることも少なくなかった(卯田, 2014)。

しかし、大洗町については大正末に海浜へ至る鉄道が開業し、都市からの交通利便性は高まったものの、大洗磯前神社周辺に対する開発資本および聖地側による観光開発は行われていない。この要因として、大洗磯前神社の由緒および信仰基盤と、神社が立地する地形的条件の2点が指摘できる。前者については、大洗磯前神社は観光開発が進行した昭和戦前期に国幣中社に列せられており、由緒ある神社としての地位にあった。したがっ

て、神社側では神社の尊厳を維持するうえでも、開発資本との関係を強化することは困難であったと考えられる。また、神社としては観光客を含む参拝者の増加という目的を含意していたとしても、開発に協力する行動は批判の対象となることもある。とくに、聖地への開発が活発化していた昭和戦前期には、政府内でこうした開発が「神社の尊厳を傷くるもの」として問題視されており⁷⁾、観光との関わりは困難であった。他方で、聖地側における観光との関係強化の理由のひとつとして、参拝者の増加に伴う経済的安定がある。しかし、大洗磯前神社はその由緒から広く信仰を集めており、経済的側面は前景化されていなかったと考えられる。また、戦前から戦後にかけては宗教制度が大きく転換し、経済的および信仰の基盤が喪失する社寺が多くみられたが、大洗磯前神社では漁師や医薬品関連業者、献饌講などの特定組織との結びつきがあったことから、戦後以降も比較的安定した信仰基盤を有したと推察される。

後者については、大洗磯前神社が鎮座する大洗山周辺は起伏が激しく、平坦な土地があまり多くないという地形的特徴がある。そのため、開発資本としては開発に要する土地を十分に確保できなかったことが指摘できる。また、大洗山一帯は大洗磯前神社の境内地であり、神社の尊厳維持の観点から開発を行うことは容易ではなかったと考えられる。この点は前者の要因と結びつくものである。

しかし、近年の団体ツアーへの対応や、ガラン関係の誘致策への協力は、これまで観光との関わりが少なかった大洗磯前神社の新たな動きとして注目される。ただ、前者の団体ツアーでは神社側から旅行会社への働きかけなどは行っておらず、各社からの問い合わせに対応するという形をとっている。また、後者においても神社自らが商品開発・販売を行っているわけではない。こうした大洗磯前神社の姿勢からは、新たな観光動向と部分的には関わりをもちつつも、観光と一定の距離を保つことで神社の尊厳や真正性を維持していることがうかがえる。

V おわりに

本稿は大洗磯前神社における信仰と観光との関係について検討した。

近代以降における観光の進展に伴い、風光明媚な聖地の中には周辺地域が観光対象とされたことで、大きな変貌を遂げた場所が存在した。大洗磯前神社においても明治末ごろから大洗町内の海岸が海水浴場として注目され、多くの観光客が詰め掛けるようになった。戦後になると当地域は茨城県内の主要な海滨観光地域へと発展した。その中で、大洗磯前神社は大洗町の観光資源のひとつとして戦後以降、一貫して重要な位置を占めた。しかし、神社側では由緒および信仰基盤、地形的条件の2点から開発資本との関係を強化しなかった。また、近年の新たな観光動向に対しても積極的に関わっていない。先行研究では聖地側と開発資本を中心とした外部主体は緊密に連携し、相互依存的関係であるとの指摘がなされてきた。しかし、神社の歴史的背景やその立地性といった聖地自体の特性を子細に検討すると、本稿で明らかとなった大洗磯前神社のように観光動向が変化する中においても観光と一定の距離を保つ聖地も存在している。こうした聖地の特性を理解することは、

近代以降の聖地と観光との関係を多面的に捉えるうえでも重要な意味をもつと考えられる。

他方で、大洗磯前神社では団体ツアーの一部の観光客が神社の尊厳に魅了されて後日昇殿祈禱に訪れたり、ガルパンファンが境内の荘厳さから再び来訪したりすることも生じている。これは、観光との距離を保つことで神社の尊厳や真正性を維持する大洗磯前神社の姿勢自体が、逆説的に「観光対象としての真正性」を与えていると捉えることができる（山中、2012：24）。とくに、現代は宗教をひとつの資源として断片的に消費する事態が加速しており、こうした来訪者は今後も増加するものと考えられる。

ただ、新たな来訪者がみられる一方で、地元において信仰を担ってきた氏子や漁師と大洗磯前神社との関係は希薄になりつつある。神社側ではその対策として氏子青年会を結成し、地域との新たな関わりを創り出そうとしている。神社がその地域に存在している以上、地域住民との関係は重要である。少子高齢化が進行する現代において、神社がこれまでと同様に存続していくためには、観光を介した新たな来訪者への対応とともに、地域住民との関係についても重視していく必要があるだろう。

本稿の作成に際し、飯塚重氏（大洗磯前神社宮司）をはじめとする大洗磯前神社関係者の皆様には社務所所蔵資料の閲覧、および長時間にわたる聞き取りなど多大なるご協力を賜りました。また、白庭明信氏（大洗町漁業協同組合参事）には貴重なお話をお伺いすることができました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。なお、本研究にあたり平成27年度科学研究費補助金基盤研究（A）「世界遺産の創造と場所の商品化に関わる理論的・実証的研究」（研究代表者：松井圭介）の一部を使用した。

【注】

- 1) 遷宮の時期は1730年とする文献（『水戸藩神社録』）と1725年とする文献（『新編常陸国誌』、『磯浜誌』）がみられる（大洗町史編さん委員会編、1986：343）。本稿では『大洗磯前神社誌』の記述によった。
- 2) 鉄道開業以前における大洗への移動は、水戸駅から徒歩8町、港町一祝町間の汽船に乗り、祝町から約20町の海岸沿いを歩くルート（大浜、1910：231-232）、あるいは水戸から馬車電車および乗合自動車であった。
- 3) なお、水浜電車は経営方針の転換やモータリゼーションの進展にともなう利用者減少のため、1966年5月に営業廃止した（中川、1981：268-271）。その後、水戸—大洗間は1985年3月に鹿島臨海鉄道により開業した。
- 4) 1988年刊行の『JTBの新日本ガイド 房総・水郷・茨城』は願入寺の項目はあるが、その記載は2行と少ない。

- 5) 『朝日新聞』, 2011年11月1日の記事による。
 6) このスタンプラリーは好評であったため, 2014年8月に再度実施されている。
 7) 「鋼索鉄道等敷設に関する件依命通牒」『史蹟名勝天然紀念物』(第3集第4号, 1928)による。

【文 献】

- 青木栄一 (1973). 観光開発と交通. 地理, **18**(3), 57-63.
- 青野寿郎 (1953 a): 『漁村水産地理学研究 第一集』古今書院.
- 青野寿郎 (1953 b): 『漁村水産地理学研究 第二集』古今書院.
- 阿部友紀 (2007). ある一漁民の祈願と生業－山形県鶴岡市由良地区にみる－. 東北宗教学, **3**, 17-35.
- 五十嵐卓三 (1976): 善宝寺の信仰. 藤沢周平・五十嵐卓三『海と山と善宝寺－龍を見た男－』山形新聞社, 68-99.
- 五十嵐忠孝 (1971): トカラ列島漁民の“ヤマアテ”－伝統的漁撈活動における位置測定－. 人類学講座編集委員会編『人類学講座12 生態』雄山閣出版, 139-161.
- 石井藤喜男 (1979): 『鬼坊裏別荘 その1』石井藤喜男.
- 伊藤純郎 (1990): 『三浜漁民生活誌－大洗地方の近代史－』嵩書房.
- 位野木寿一 (1959): 金毘羅灯籠の交通地理的意義. 人文地理, **11**, 195-214.
- 茨城交通株式会社三十年史編纂委員会編 (1977): 『茨城交通株式会社三十年史』茨城交通株式会社.
- 今井信治 (2009): アニメ「聖地巡礼」実践者の行動に見る伝統的巡礼と観光活動の架橋可能性－埼玉県鷲宮神社奉納絵馬分析を中心に－. 北海道大学文化資源マネジメント論集, **11**, 1-22.
- 岩井宏實 (1987): 住吉と金毘羅. 守屋 毅編『金毘羅信仰』雄山閣, 93-103.
- 岩井宏實・日和祐樹 (2007): 『神饌－神と人との饗宴－』法政大学出版局.
- 植島啓司 (2000): 『聖地の想像力－なぜ人は聖地をめざすのか－』集英社.
- 卯田卓矢 (2014): 観光地としての都市近郊霊山の形成と展開プロセス－開発資本の動向を中心として－. 旅の文化研究所研究報告, **24**, 1-18.
- 江原忠昭 (1960): 『大洗地方史』江原忠昭.
- エリアーデ, M. 著, 風間敏夫訳 (1969): 『聖と俗－宗教的なるものの本質について－』法政大学出版局.
- 大洗町史編さん委員会編 (1986): 『大洗町史 通史編』大洗町.
- 大浜六郎 (1910): 『避暑案内』服部書店.
- 岡田米夫 (1981): 『大洗磯前神社誌』熊田正治.
- 岡本 健 (2009): らき☆すたの聖地「鷲宮」巡礼と情報化社会. 神田孝治編『観光の空間－視点とアプローチ－』ナカニシヤ出版, 133-144.
- 岡本亮輔 (2015): 『聖地巡礼－世界遺産からアニメの舞台まで－』中央公論新社.
- 拝身朋幸 (2013): 『Ema Ema MISSION . 1 bis』拝身朋幸 (茨城県立図書館所蔵).
- 小口千明 (1985): 日本における海水浴の受容と明治期の海水浴. 人文地理, **37**, 215-229.
- 小野寺正人 (1991): 陸前金華山信仰について. 『陸前の漁撈文化と民間信仰』ヤマト屋書店, 113-122.
- 柿本典昭 (1975): 『漁村の地域的研究－水産地理学への道標－』大明堂.
- 鎌田東二 (2008): 『聖地感覚』角川学芸出版.
- 北見俊夫 (1970): 海上の信仰. 日本民俗学, **70**, 1-35.
- 北見俊夫 (1973): 『日本海上交通史の研究－民俗文化史的考察－』鳴鳳社.
- 久信田喜一 (2010): 大洗磯前神社の八朔祭. 小室 昭監修『水戸・笠間・小美玉の今昔－保存版－』郷土出版社, **87**.
- 栗田 勇編 (1983): 『海の聖地 金毘羅』山陽新聞社.
- 五来 重 (1986): 薬師信仰総論－薬師如来と庶民信仰－. 五来 重編『薬師信仰』雄山閣出版, 3-30.
- 近藤喜博 (1987): 『金毘羅信仰研究』嵩書房.
- 斎藤 毅 (1998): 漁民の「山たて」と農民の「雨乞い」. 『漁業地理学の新展開』成山堂書店, 9-25.

- 桜田勝徳 (1980) : 漁撈伝統の世界. 『桜田勝徳著作集 第2巻 漁民の社会と生活』名著出版, 172-212.
- 佐藤憲昭 (1988) : 善宝寺信仰とシャーマニズム. 桜井徳太郎編『日本宗教の正統と異端』弘文堂, 215-232.
- 神祇院編 (1972) : 『官國幣社特殊神事調』国書刊行会.
- 鈴木章生 (1992) : 相模大山信仰の成立と展開. 圭室文雄編『大山信仰』雄山閣出版, 106-125.
- 高木大祐 (2007) : 青峯山正福寺信仰をめぐる - 大漁祈願・航海安全祈願の展開 -. 民俗学研究所紀要, **31**, 137-162.
- 高橋信行 (1895) : 『大洗海水浴場誌』高橋信行.
- 滝 興治 (1902) : 『常陸の海水浴』常総新聞社.
- 圭室文雄編 (1992) : 『大山信仰』雄山閣出版.
- 對馬路人 (2012) : 鉄道と霊場 - 宗教コーディネーターとしての関西私鉄 -. 山中 弘編『宗教とツーリズム - 聖なるものの変容と持続 -』世界思想社, 32-57.
- 中川浩一 (1981) : 『茨城の民営鉄道史』筑波書林.
- 西海賢二 (2008) : 『富士・大山信仰』岩田書院.
- 野村史隆 (1992) : 伊勢・志摩海民の漁撈と民俗. 網野善彦ほか編『海と列島文化8 伊勢と熊野の海』小学館, 441-482.
- 野本寛一 (1988) : 当て山と当て木 - 信仰の基層をなす漁撈民俗 -. 静岡県民俗芸能研究会『静岡県・海の民俗誌 - 黒潮文化論 -』静岡新聞社, 177-188.
- 藤田 稔 (2002) : 『茨城の民俗文化』茨城新聞社.
- 前川智子 (2010) : 有賀祭. 茨城県教育庁文化課編『茨城県の祭り・行事 - 茨城県祭り・行事調査報告書 -』茨城県教育委員会, 153-156.
- 松尾須美礼 (2002) : 銚子市川口神社を巡る神事の変遷と信仰圏の形成 - 銚港神社との比較から -. 歴史地理学調査報告, **10**, 31-40.
- 松尾須美礼 (2004) : 銚子市川口神社を巡る漁業と信仰の変遷 - 大正から昭和20年代を中心に -. 歴史地理学調査報告, **11**, 1-14.
- 松川二郎 (1928) : 『土曜から日曜』有精堂書店.
- 真弓常忠 (2003) : 『住吉信仰 - いのちの根源, 海の神 -』朱鷺書房.
- 宮田 登 (1969) : 金華山信仰とミロク. 和歌森太郎編『陸前北部の民俗』吉川弘文館.
- 村田朱美 (1990) : 大洗磯前神社の神事 (三). 西郊民俗, **133**, 26-34.
- 森 悟朗 (2009) : 参詣篇 - 神社と参詣・観光 -. 新井大祐・大東敬明・森 悟朗『言説・儀礼・参詣 - 「場」と「いとなみ」の神道研究 -』弘文堂, 241-359.
- 守屋 毅編 (1987) : 『金毘羅信仰』雄山閣.
- 藪内芳彦 (1958) : 『漁村の生態 - 人文地理学的立場 -』古今書院.
- 山中 弘 (2012) : 「宗教とツーリズム」研究に向けて. 山中 弘編『宗教とツーリズム - 聖なるものの変容と持続 -』世界思想社, 3-30.
- 山中 弘編 (2012) : 『宗教とツーリズム - 聖なるものの変容と持続 -』世界思想社.
- 由谷裕哉・佐藤喜久一郎 (2014) : 『サブカルチャー聖地巡礼 - アニメ聖地と戦国史蹟 -』岩田書院.
- McKelvie, J. (2005) : Religious Tourism. *Travel and Tourism*, **4**, 1-47.
- Stausberg, M. (2010) : *Religion and Tourism : Crossroads, Destinations and Encounters*. Routledge.
- Swatos, W H. Jr . and Tomasi, L eds (2002) : *From Medieval Pilgrimage to Religious Tourism : The Social and Cultural Economics of Piety*. Praeger.
- Timothy, D.J. and Olsen, D.H. eds (2006) : *Tourism, Religion and Spiritual Journeys*. Routledge.

英文タイトル

Religion and Tourism in the Oarai Isosaki Jinja Shrine

UDA Takuya and MATSUI Keisuke